

シロからのメッセージ

シロからのメッセージ

発行者からの説明

2002年7月にシロから発せられたメッセージは、「書籍」「経験」「道」の3つの部門で構成されています。

「書籍」は「内なる眼差し」というタイトルでも知られています。

「経験」は8つの儀式から成り立っています。

「道」は内省と助言を合わせたものです。

この版には「メッセージ」の全てが含まれていません。

書籍

I. 瞑想

1. ここに人生の無・意味さが、意味ある充実したものへどう変わるかを語る。
2. ここに喜びがあり、身体への愛、自然への愛、人類への愛、そして魂への愛がある。
3. ここに犠牲や罪の意識、あの世からの脅迫は拒否される。
4. ここに現世と永遠は対極にない。
5. ここに注意深く瞑想し、謙虚に探求する誰もが到達する、心への啓示を語る。

II. 理解へ到達するための姿勢

1. 私はあなたの気持ちが理解できる。なぜなら今あなたがいる状態を実体験できるからだ。しかし、あなたは私の言っていることをどう体験すればいいのかわからないだろう。私の言っていることが、私利私欲なく人類の幸せと自由を謳うものであるから、それを理解しようとすることに価値がある。
2. 私と議論することで理解できると思わないでほしい。もし議論により理解が深まると信じるのなら、それは可能だ。ただそれはふさわしい道ではない。
3. どのような態度が適切かと問われれば、私はここに説明されたことを、焦ることなく、深く瞑想することだと答える。

4. もし、あなたがより急ぎの事情があると応えるなら、私の返事は、あなたの望みは眠ることか死ぬことであるから、何も反論することはない。
5. 私のやり方が気にいらぬからと反論すべきではない。食べた果実が美味しければ、その皮をとやかく言う者はいないだろう。
6. 私は自分が適切だと思うことを述べるのであって、心の真実とかけ離れたことを望む人たちに気に入ってもらえるように話をしようとは思わない。

III. 無・意味

長い時を経て、私はある逆説にたどり着いた。それは、心に敗北感を負うものは最期に勝利に輝き、勝利に酔いしれた者は、植物人間のように日の目を見ず取り留めなく、人生の道端に置き去りにされる。

長い時を経て、私は暗黒の闇から光に到達した。それは何かの教えによるものではなく、瞑想によって導かれたものである。

第一日目に私はこう語った：

1. もし、死で全てが終わるのであれば、人生に意味はない。

2. 行いの善し悪しは、軽蔑されようが評価されようが、常に新たな夢となり、先々に虚しさを生むだけである。
3. 神とは不確かなものだ。
4. 信念は理由や夢のように変動するものである。
5. 「何をすべきか」は徹底的に議論されても、最終的にそれを裏付けるものはない。
6. 自らが負う「責任」は、負わない者の「責任」よりも大きいとは言えない。
7. 私は自分の関心に基づいて行動する。これは私を臆病者にも英雄にもしない。
8. 私の「関心」は何も正当化することなく、信用を消し去ることもない。

9. 私の「判断」は他の人のそれに勝るものでもなければ、劣るものでもない。
10. 私は残酷さを恐れるが、だからと言ってやさしさと残酷さに勝劣はない。
11. 私でも他の人でも、今日話した言葉は、明日には何の価値も持たない。
12. 死ぬということは、生きることや生まれてこないことと比較して、良くもなく悪くもない。
13. 全てが死で終わるのなら人生には意味がないという事を、私は教えを通してではなく、体験と瞑想により理解した。

IV. 依存

第2日目

1. 私の行動・感情・思考の全ては、私に依存していない。
2. 私は無常であり、私を取り巻く環境の動きに依存する。自らの環境や「自我」を変えたい時、最終的に私を変えるのは環境である。そこで私の存在を証明してくれる街や自然、社会の救済、新たな挑戦を探す。いかなる場合においても、自分がどの態勢をとるかを決めるのは環境である。このように自分の関心と環境が、ここに私を位置づける。

3. 私はまたこう言いたい。誰が何を決めようと構わない。更にこれらの場合に言いたいの
は、私は生きる立場にあるから生きるのだ。
いろいろ言ったところで、それら全てを立証
するものは何もない。私は自分で決めること
ができるし、ためらうことや留まる事もでき
る。いずれにせよ、どれかが一時的に勝って
いるだけであって、最終的に良し悪はない。

4. 物を食べなければ死ぬと誰かが言えば、私は
その通りと応えるだろう。必要性に駆られ
て、人は食べざるを得ない。しかし食べるた
めの苦労は、苦労する者の存在を正当化する
ことはなく、同時にその苦労が悪いとも言え
ない。これらを単に言うと、個人が生きるた
め、あるいは俗にいう生きるための物資の必
要性に関わることであって、最期の戦が負け
に終わる時には何の意味もなさない。

5. 更に言うならば、私は貧しい者、搾取された者、虐げられた者たちの苦悩に共鳴する。そして彼らと一体感を抱く事に充実感を覚えるが、これらの感情は何も正当化しないと理解する。

V. 意味への暗示

第3日目

1. ある時、私は先に起こるであろうことを予測したことがある。
2. ある時、私は遥か彼方の思いを察したことがある。
3. ある時、私は一度も訪れたことのない場所を描写したことがある。
4. ある時、私がいなない時に何が起こったかを正確に供述したことがある。

5. ある時、止めどもなく湧きあがる喜びに驚かされたことがある。
6. ある時、完璧な理解に圧倒されたことがある。
7. ある時、あらゆるものとの完璧な統一感に我を忘れたことがある。
8. ある時、夢を切り抜け、現実を新たな眼差しで見たことがある。
9. ある時、初めて見たものが、過去にも見た事があると改めて感じたことがある。

…これらの出来事から考えさせられた。これらの経験なくして私は無・意味から抜け出すことはできなかつたであろう。

VI. 眠りと目覚め

第4日目

1. 私は、夢に見たことや、半睡眠状態の中で見たことを現実として受け入れることはできない。また目覚めている状態で見た空想も現実として受け入れることができない。
2. 私は、目覚めた、しかも、空想のない状態で見ただけを現実として受け入れる。私がここで言う現実とは、自分の感覚がもたらすものではない。なぜなら「情報」は外部や内部の感覚器を通し、あるいは記憶から伝達されたもので、それらは極めてナイーブで曖昧である。むしろ私が言っているのは思考された「情報」に関する意識活動のことである。

確かなのは、意識が覚醒している時にはそれを「知り」、眠りにある時にはそれを「信じる」。極稀に現実を新たに見ることもあるが、その時は普段目にするのが、眠りや浅い眠りの状態で見ると酷似していることに気付く。

本当の意味での目覚めは存在する。それは、ここまで語られたことについて深く瞑想することへと私を導いた。更に、存在するもの全ての意味を見つける扉を開いてくれた。

VII. ^{フォース} 気の力の存在

第5日目

1. 真に目覚めていた時に、私は理解から理解へと駆け登った。
2. 真に目覚め、更に上昇を続ける力が必要だった時、私は自身の^{フォース}気の力を引き出すことができた。この^{フォース}気の力は全身にみなぎり、最も小さな細胞の一つ一つにまで、満ち溢れていた。そして血液よりも強く速く体内を駆け廻った。
3. 身体の一部が活発な時、そのエネルギーはそこに集中し、活動していない時は欠損していたことがわかった。

4. 病気の時は、その部分にエネルギー不足が生じるか、または逆に集中する現象が現れた。しかしエネルギーの循環を平常化させることが出来ると、多くの病は後退し始めた。

このような知識を理解していた人々は、現代では不思議に思えるような様々な方法を用いてエネルギー循環の回復を行っていた。

このような知識を理解していた人々は、エネルギーを他の人々へ渡したり、悟りの「光」や物理的な「奇跡」などを起こしていた。

VIII. ^{フォース} 気の力のコントロール

第6日目

1. 体内を駆け回る^{フォース}気の力を誘導し、集中させる方法がある。
2. 身体各所には我々の知るところの動作、感情、思考などを司るポイントがある。これらのポイントで力が活性化すると、それぞれに呼応した行動力や感情、知的能力に現れる。
3. エネルギーが身体の内部に現れるか、表面的に現れるかで、深い眠り、半睡眠、覚醒状態を起こす。……宗教絵画に見られる聖人（又は悟りを開いた者たち）の身体や頭部を囲む

後光は、確かにこのエネルギーの現象を示したものであり、それが外部に現れたことを示している。

4. 「真に目覚めている」状態を司るポイントがあり、そしてそこへ^{フォース}気の力を誘導する方法がある。
5. エネルギーがそこへ導かれる時、その他全てのポイントも新たな動きを見せる。

これまでの内容を十分に理解し、内なる^{フォース}力を最高の一点へ集中させた時、私は巨大な内なる^{フォース}力の衝撃を体全体で感じた。このエネルギーは私の意識を強く刺激し、私は理解から理解へと駆け登った。

また、一旦この内なる力フォースのコントロールを失うと、意識が闇の底に落ちうることにも気づいた。その時「天国」と「地獄」の話を思い出し、これら二つの精神状態の境界線を見ることができた。

IX. エネルギーの明示

第7日目

1. ここで言う活動中のエネルギーは、統一感を保ちながら身体から「独立」することができた。
2. この統一されたエネルギーはある種、身体ふたえの二重であり、心象空間内の肉体的感覚の表象に呼応する。心理現象を研究している科学は、ここで言う空間や身体内部の感覚に呼応する表象に関して十分な注意をまだ払っていない。
3. このようにして、あたかも身体の『外』や肉体から『分離』したもののよう^にに写る複製さ

れたエネルギーは、それを担う者の内にある統一感の度合によって、イメージとして解消されるか又は正しく表象される。

4. 私は、自分の身体が、身体の「外」のものと表象されるこのエネルギーの体外離脱が、最も低い意識段階でも起こる事を確認した。これは、生命そのものが最も危険な状態に曝された時に起こる反応であり、その危機状態から身を守ろうとして起こる現象である。従って、トランス状態にある霊媒者などが - 意識レベルが低い上、内なる統一性も危険に曝されている中 - 無意識のうちに自らが起こしているという認識無く、他の何かであるとした。

占い師などが言う霊や幽霊は、取り付かれたと感じている彼ら自身の二重（自分自身が表象したも

の) 以外の何者でもない。彼らの精神状態は、
^{フォー}気の力のコントロールを失い、暗闇（トランス）に陥ることから、何かにとりつかれたと感じているに過ぎない。時にそれは著しい現象を起こすことがある。「取りつかれた」多くの人たちが、それに苦しんだことに疑いの余地はない。すなわち、決定的なのは^{フォー}気の力をコントロールすることにあつた。

これらは、私の現在及び死後における生命の概念を完全に覆した。このような考えと経験を通して、私は死に対する信念を失っていき、以来、人生の無・意味さを信じることはなく、同様に死を信じることも無くなった。

X. 意味の証

第8日目

1. 目覚めた人生の真の重要性が明らかとなった。
2. 心の中の矛盾を除外することの真の重要性を納得した。
3. 統一感と持続性を実現するために^{フォース}気の力を洗練することの真の重要性が私の人生の意味を喜びで満たした。

XI. 光の中枢

第9日目

1. ^{フォース}気の力において「中枢」より生ずる「光」があった。
2. エネルギーの消失と共に遠ざかり、一方、エネルギーが一体となり進化しようとする時、光を放つ中枢がそこにはあった。

多くの古代人が太陽の神に祈りを捧げたことに、私は疑問を抱かなかつた。太陽が大地や自然に命を与えたことで、人々はこの天の存在を崇拜し、また人々はその荘厳な姿の中に偉大な真実を見出したのだと理解した。

更にこの中枢から、計り知れない能力をを授かった人々もいた。それは時に炎の舌となって啓示を受けた人々の元に舞い降り、時には輝く球体として、またある時は燃える茨となって恐れおののく太陽の信仰者の前に現れた。

XII. 気づき

第10日目

数少ないが、貴重な気づきを私は以下のようにまとめた。

1. ^{フォース} 気の力は意識しなくとも体内を循環するが、努力により方向づけることができる。意図的に意識のレベルを変化させることで、人は「当たり前」だと認識している意識の状態から解放される貴重な瞬間を垣間見ることができる。
2. 身体には、あらゆる活動をコントロールするポイントが点在する。

3. 真に目覚めている状態とその他の意識のレベルとの間には違いがある。
4. 「^{フォース}気の力」とは特定なイメージを伴う精神的エネルギーのことであり、この点在するポイントとは心的空間の一定の場所にそのイメージが置かれる位置のこととする。そして^{フォース}気の力を真に目覚めるポイントへ導くことができる。

このような結論から、私は古代の人々の祈りの中に尊い真実の芽があったことを認識した。しかしこの真実は、人々が行ってきた形式的な儀式や慣習の中で、不明瞭なものとなってしまった。心の修行を重ねていけば自身の光の源泉と結びつけることができたのだが、それは不可能となった。

結論として、私の「気づき」は目新しいものではなく、矛盾無く、心に光を求める者であれば、誰もが到達する内なる啓示であることを理解した。

XIII. 原理

稲妻のごとく内なる啓示に打たれた時、生命と物事への姿勢に変化が現れた。

ゆっくりと順序に従い、既に述べられたこと、これから述べられることに瞑想すれば、無・意味を意味あるものに変えることが出来る。それは、あなたが人生で何を成すかに無関心ではいられなくなる。規律に基づくあなたの人生は何でも自由に選択できる可能性にあふれている。

私は単なる自由について述べているのではない。自由を導く変動や過程について述べているのである。

それは停滞した自由ではなく、自分自身を一步一步解放していく自由である。それはあたかも旅人

が都へ近づくにつれ、その歩んで来た不可欠な道のりから解放されていく、その自由である。よって「成すべきこと」は、かけ離れた理解しにくい習慣的な道徳ではなく、命の法則、光の法則、そして、進化の法則に基づくのである。

内なる統一性の追求に役立つ「原理」がここにある。

1. 物事の進化に反することは、自身に反することとなる。
2. 結末を強いると逆が生じる。
3. 絶大な威力に逆らうべからず。その勢いが衰退するまで退き、決意して前進せよ。
4. 物事はそれぞれで動くより、一同に動くとうまくいく。

5. 昼と夜、夏と冬のどちらも良好であれば、矛盾を克服したことになる。
6. 快楽を追い求めると苦悩に縛り付けられる。しかし健康を害さない限り、機会があれば制する事なく楽しむべし。
7. 結末を追い求めれば自分を束縛することになる。全ての行いにおいて、それぞれが目的であると実行すれば、自分自身を解放する。
8. 問題はその根元を理解する時に解消されるのであって、解決を求める時ではない。
9. 人を傷つければ自分を束縛する。誰も傷つけることがなければ、何でも自由にしてよい。
10. 自分が他人に望むように人に接すれば、自らを解放する。

11. どこの派閥に、どんな成り行きで属したのかは重要ではない。大切なのは自身がどの派閥をも選んでいないと納得することだ。
12. 矛盾した行動と統一性ある行動は蓄積される。内なる統一性のある行動を繰り返せば、あなたを拘束するものは何もない。

行く手を阻むものがない時、あなたは自然の猛威となるであろう。困難や問題、そして障害というものを矛盾と区別することを学ぶべきだ。前者はあなたを揺さぶり、そして駆り立てるのに対し、矛盾は出口のない回路にあなたを閉じ込める。

自分の心に偉大な力や喜び、優しさを見出したとき、または心に矛盾なく自由を感じるとき、即座に心の中で感謝しなさい。

逆にそうではない状態に気付いた時、今まで蓄積してきた感謝の念が形を変え大きくなって戻ってくることを心から信じ、願いなさい。

XIV. 心の道しるべ

ここまで説明してきたことを理解するなら、簡単な練習を通してあなたは^{フォー}気の力を実現し体験できるでしょう。しかしながら、これは（あたかも機械的な作業を行うかのように）正しいと思われる考え方で取り組むのと、詩的情緒や詩がもたらす心の開放感をもって取り組むのとでは種を異なる。真実を伝えるためのこれらの言葉は、「内なる知覚力」という概念よりも、「内なる知覚力」そのものを容易に実感できる体勢を促すことを意図とする。

では、これから説明することに慎重に従ってもらいたい。なぜならそれは、^{フォー}気の力を体験しているとき遭遇するかもしれない心象風景や、自らの思考活動の方向性を印象づけることに関するからである。

「心の道を辿るには闇と光がある。目の前に広がる二本の道に目を向けよ。

暗闇の世界に身を投じれば、肉体が勝利支配する。すると精霊や気を感じたり、あらゆる記憶が蘇るであろう。そして、その先は落下の一途を辿る。そこには憎しみ、復讐、不気味さ、物欲、嫉妬、そして執着心がはびこっている。そして更に落下すると、あらゆる不満や嫌悪感、今まで人類を死と破壊へ導いてきた夢や欲望に侵略されるであろう。

もし自身を光の方向へ推し進めると、その一步一步に抵抗と疲労を感じるであろう。この上昇に伴う疲労にはそれなりの理由がある。あなたの人生の重み、記憶の重み、過去の行いが上昇を妨げるであろう。あなたを支配しようとする肉体の動きが、この上昇を更に困難にさせるであろう。

上昇を続けていくと、純粹な色や未知の音色に満たされた、不思議な領域に出くわすであろう。

浄化を避けてはならない。それは燃える炎のように動き、亡霊のごとくあなたの恐怖心をあおるだろう。

心の動揺と絶望感をはねのけよ。

低く暗い領域へ逃れたいという思いをはねのけよ。

記憶への執着をはねのけよ。

夢景色に惑わされることなく、上昇の決意と共に心の自由を維持せよ。

清らかな光は広大な山脈の峰々を照らし、幾千もの色を帯びた水は、聞き覚えの無い旋律の中、水晶のように輝く高原や大草原を流れる。

光からの圧力を恐れることはない。中心に近づこうとすればするほど、その力は強さを増し、あなたを中心から遠ざけようとする。その力をあたかも液体か風であるかのように受け入れなさい。そこには正しく、命がある。

広大な山脈の峰に秘境の都を見つけたとき、あなたはその門のありかを知るのだ。ただしその門は、あなたの命が姿を変えた瞬間に明らかとなる。その巨大な扉は様々な模様や色で描かれ、それらを「感じ取る」であろう。この都には成し遂げてきたことと、これから成し遂げるであろうことが秘められている。しかし、あなたの心の目には透明も不透明に写る。そう、これはあなたには突き破れない扉なのだ！

この秘境の都が放つ^{フォース}気^の力を受け入れなさい。そして、額と手を輝かせながら、密に凝縮された日常の世界に戻るのです。

XV. フォース 安らぎの体験と気の力の流れ

1. 身体の緊張を和らげ、心を静めます。そして、頭上に透明かつ光り輝く球^{たま}を思い浮かべましょう。この光の球^{たま}が静かに降りてきてあなたの胸の中に収まります。その瞬間、球^{たま}のイメージが消え、胸の中で感覚へと変わっていく事に気づくでしょう。
2. 呼吸が大きく深くなるにつれて、どのようにこの球^{たま}が胸の中からゆっくりと、体の外へと広がっていく感覚へ変わっていくかに注意しよう。この感覚が身体の間々まで行き渡ったら、心の安らぎを実感したことを心に刻み、そこで終了するか、または心行くまでその安らぎに浸る。この体験を心穏やかに新鮮な気持ちで終わるにあたって、最初に広げた感覚

を逆の工程を辿りながら胸の中央へ向けて徐々に小さくし、最後に胸の中から球^{たま}を放ちます。これを『安らぎの体験』と呼ぶ。

3. 更に気の力^{フォース}の流れを体験したい場合は、気持ちと身体のをその力に委ね、感覚を広げていかなければならない。その間、体の外に感覚を拡大する際は、呼吸は意識せず自然に任せよう。
4. 繰り返すが、この時あなたは、拡大して行く球^{たま}の感覚に意識を向けなければならない。それが無理な場合は、一旦中止し、また別の機会に試す事を勧める。たとえ気の力^{フォース}の流れを生み出せなかったとしても、意味深い安らかな感覚を体験するであろう。
5. さらにその先に進んで行くと、あなたは気の力^{フォース}の流れを感じ始めるだろう。手や体の他の部分

にいつもとは異なる感覚が生じ、やがてそれは高まるうねりとなり、そのうち鮮やかなイメージと強い感情も沸き上がってくる。そうしたら、その流れに任せなさい……。

6. あなたの普段の表現方法にもよるが、^{フォー}気の力を授かったら、光や不思議な音に気づくだろう。いずれにせよ、大切なのは意識が増していくことを実感することであり、これはさらに深くなっていく明瞭さと、自分に何が起きているかを理解しようとするその姿勢に現れる。
7. この特別な状態を時が経過しても持続できるのであれば、始めに^{たま}球を広げた時とは逆の工程をたどり、小さくした^{たま}球が体から去っていくのをイメージするか、その感覚を覚えることで終了できる。

8. 多くの異常心理状態はどれもほぼ似通った方法で達成される、ということにここで注目したい。それらは不可解な儀式などに垣間みることができる。時にそれらの方法は極度の肉体疲労や無制御な身体の動き、反復動作や無理な姿勢などを用いて呼吸を乱し、基本的な身体の中の感覚を歪めることによって強化されている。この分野では、また催眠術や霊媒行為、薬物による影響などがあることを認識すべきだろう。それぞれ異なる手段ではあるが、どれも似たような超常現象をもたらす。これら全てのケースに共通する特徴は、コントロールする能力の欠如と、何が起きているかの自覚意識が欠けていることによる。このような現象を信じてはいけない。これらを単に興味本意や無知な者、また（伝説にもあるような）「聖人」が通ったとされる「恍惚な状態」だと解釈すればよい。

9. ここまでの助言に従っても、^{フオー}力の道を開くことが出来ない場合もあるが憂慮することはない。これは単に心が「解放」されていないことの現れであり、それらは過度の緊張やイメージの働きに問題があることを反映しているのである。要するにこれらは感情の断片化を現し、それは自身の日常生活にも見てとられることであろう。

XVI. ^{フォース} 気の力の投影

1. ^{フォース} 気の力の流れを経験していけば、様々な人々が似た様な体験をもとに、理解に欠けていたとはいえ、オカルトじみたものを作り、後にそれが際限なく広がっていった事が理解できるだろう。更に、このような^{フォース}気の力の体験を通して身体の「分身」を感じた者には、エネルギーを体の外に投影できるという感覚を与えた。
2. ^{フォース} 気の力は人に「投影」する事が可能で、「適切」なものであれば、たとえ物体でも^{フォース}気の力を受け取り、それを蓄えることができる。そして様々な宗教儀式の役割、聖地とされる場所や聖職者などが、^{フォース}気の力に「満ちている」とされることが容易に理解できるだろう。寺

院仏閣などで、特定のものが儀式や典礼に取り囲まれ、また信仰心をもって崇拝されると、それは信者からの度重なる祈りによって蓄積されたそのエネルギーを確実に「還元」した。これらを理解する上で肝心なのは、基盤となる深部での体験である。しかし、よくありがちなのは、その理解への試みがそれぞれの文化、地理、歴史や伝統などの外面的なものに限られており、これは人間の現実への知識に限界がある事を明らかにしている。

3. ^{フォース}気の力の「投影」「増強」「充実化」に関しては後に触れるとして、今ここで述べておきたいのは、このような仕組みは一般社会でもまた見られるものである。指導者や名高い者達は、彼らに触れたいとか、彼らの衣のひときれでも所持品の一部でも手に入れたい、また一目でも見たいと願う人々にとっては、特別なオーラに包まれているように写るのである。

4. なぜこのようなことが起こるかという、
「高さ」に象徴されるものは、目線の上に置かれ、また普段の視線より高い所に置かれる。そして俗に「上の人」と言われる人たちは、やさしさ、知恵、強さを備えているとされる。「高い」と言えばまた、そこには階級や権力、国旗や国家などにもみられる。そして、死を免れられない我々一般人は、権力に近づくためには、何をしてでも出世階段を登らなくてはならない。何と情けないことだ、我々の内部で表現されるもの全てが、この「頭が高いところ」にあって足が地に根付いているという構造に重複するがために、未だそれに操られているとは。何と哀しいものだ、このような構造を信じ込み、内部が現すものを現実だと鵜呑みにしているのだから。何と情けないことだ、我々の外面的なものの見方は、単にまだ自覚されていない内部に存在するものの投影でしかないのに。

XVII. ^{フォース} 気の力の喪失と抑制

1. エネルギーを最大に消耗するのは、コントロールが効かない行動などにより生ずる。例えば無制御な想像、無作為な好奇心、節度を越したおしゃべり、過度な性欲や肥大した感度、つまり無作為で限度無しに目にしたり、耳にしたり口にすることを含める。ここで認識すべきことは、なぜこのような行動に走ってしまうのかであり、それは、それによって緊張がほぐされ、そうでなければ苦痛を伴うためである。この上で、このようなエネルギー発散の役目を考慮すると、これらを抑制するのではなく、むしろそれらに秩序を与えることが理に適うことに同意してくれるであろう。

2. 性に関しては、次のことを正しく解釈する必要がある。この役割は抑制すべきではない。なぜならそれは心の葛藤と矛盾を生むからである。性は性行為を求め、そしてそれによって終結する。更に性行為の後に引き続き想像力に影響を及ぼしたり、新しい欲望の対象をむやみに探したりすることは実用的ではない。
3. 特定の社会的、又は宗教的「道徳」による性の抑制は、その目的を果たしてきたが、それは進化とはかけ離れ、むしろその逆となってしまった。
4. 抑圧された社会では^{フォース}気の力（体内の感覚を象徴するエネルギー）は黄昏へと後退していった。このような社会では「悪霊に取りつかれた者」や「魔女」そして生命や美の破壊に喜びを感じず、あらゆる犯罪者が増えた。ある部族又は文明では、この犯罪者達は時に責め

られる立場にあり、また責める立場にもあった。その他にも、科学の進歩は不合理なもの、黄昏たもの、そして抑圧されたものに相反するという理由で、迫害された。

5. 性の抑圧は、いわゆる「原住民」と呼ばれる人々の間に今なお存在するが、それは「進化」したとされる文明にもしばしみられる。このような状況の発端は異なるとしても、いずれも大きな破滅的痕跡を残すことは明らかである。
6. さらに言えば、性とは実に聖なるものであり、すべての生命と創造の源であると同時に、その役割自体が解決されていないとき、そこから全ての破壊が生じてくる。
7. 性を卑しむべきと唱える命の毒殺者たちの嘘を決して信じてはならない。それどころか、

そこには美があり、確実に最善な愛情に通ずるものがある。

8. だからこそ、性を偉大な不思議と捉え、矛盾の根源や生命力を脅かすものにならないよう、大切に扱わなければならない。

XVIII. フォース 気の力の作用と反作用

以前、私はこう述べた - 「偉大な^{フォース}気の力や喜び、
優しさを心を感じたなら、また矛盾のない自由を
感じたなら、すぐに心の中で感謝するように」
と。

1. 「感謝する」ということは、イメージ化した前向きな気持ちを集中させることを意味する。従来肯定的な心の状態をこのように形付けることで、自らが困難な状況に陥った際にそのイメージを呼び起こすことで、前向きの気持ちをよみがえらすことが出来る。さらに、こ精神的「充実化」は何度も繰り返すことで強化されるので、時に生じる否定的な感情と置き換えることが可能である。

2. このように前向きな気持ちを心の中で繰り返し蓄積していくことで、それらはどのような願いに対しても、色々な利益を心の中からもたらしてくれる。そしてもう繰り返す必要はないと思うが、外部の物や人、また心の中に存在するが外へ「投影された」人物像などに対して精神的「充実化」を行うという仕組みは、祈祷や嘆願でその願いが叶うと信じられ（困惑した形ではありながらも）、永らく使われてきた。

XIX. 心の中の状態

人生を通じて経験するであろう様々な心の中の状態において、特に自身の成長と進化に携わるときに、十分な洞察力を身につけておく必要がある。これらの状態を表現するのに、私は寓意的描写を使う以外、その術を知らない。それらは、複雑な気持ちの状態を集約し「視覚的」に表現できる長所を持つ。これらの状態を相互に繋げ、更にあたかもひとつの過程の中で起こる明確な瞬間として捉えるこの取り組みは稀である。それは、従来この分野の人たちにより、我々にも馴染みとなっている断片的に描写するやり方と異なる。

1. 前述したように、最初の状態「放散する生命力」では無・意味がのさばる。ここでは肉体的欲求がすべてを司るが、往々にして矛

盾したイメージや欲望と混同されやすい。ここでは、かつての行い、そしてその動機は暗闇に包まれている。この状態ではただ植物状態に伏し、常に変わる形の中に我を失う。ここから進化するには次のどちらかに従うしかない。それらは「死」の道か、あるいは「異変」の道である。

2. 死の道はあなたを暗く混沌とした光景へと導く。古代人はこの通り道を知っており、大抵これを「地下」または底知れない暗黒に位置づけた。この王国を訪れ、後に光輝く層へ「復活」とされる者もいる。死の「下」には放散する生命力が存在することをよく把握せよ。もしかすると人間は死が持たらず肉体の風化現象を、それに続く変化に重ね合わせ、そしてまたこの放散していく動きを生まれる前に起こる現象と結びつけて考えるのかもしれない。もしあなたが上昇に向かうな

らば、「死」はそれまでの状態を打ち破ることを意味する。死への道を選択することにより、あなたは別の状態へと上昇する。

3. ここへたどり着くと、あなたは「後退」という空間に身を寄せている。ここから二つの道が開く。一つは「後悔」の道、もう一つはここへ昇ってくるのに通った「死」の道である。前者を選ぶのは、自分を過去から切り離す決心をする傾向にあるからだ。死の道へ戻れば、再び深みにはまり、あなたは閉ざされた回路の罫にはまり、再び深い暗闇の中に落ちていくような感覚を覚えるであろう。

4. 前にも述べたが、生命力の奈落の底から抜け出すもう一つの道がある。それは変異の道である。その道を選ぶとしたら、それは自分の哀れな状態を突破したいがため、でもそこにある、それなりの利益を見捨てたくないか

らである。それは「ねじれた腕」として知られる偽りの道である。この曲がりくねった道の奥深くからは多くの怪物が出現した。それらは地獄を捨てぬがままに天国を占領しようとしたため、この世に果てしない矛盾をもたらした。

5. 死の王国から上昇し、心から悔い改め、傾向という境地にたどり着いたとしよう。そこは「保持」と「不満」という細い柱に支えられている。保持は偽りのうえ不安定である。この道を歩むことで普遍であるかのような思い違いをするが、実際は急激に降下の一途をたどる。もし不満の道を行くなら、その登りは険しいが、これが唯一、偽りのない道である。

6. 失敗を繰り返しながら「岐路の庵」と呼ばれる休息の場へ着くことができる。目の前に広がる二つの道に気をつけよ。「創生」へと導く決意の道を選ぶか、「恨み」の道を選んで、再び後退に落ちていくかのどちらかだ。そこであなたは板ばさみになる。「決意」を持って、自覚ある人生の迷路を選ぶか、「恨み」で前の人生へ逆戻りするかだ。ここで自分自身を乗り越えることができず、可能性を断ち切ってしまう者が大勢いる。

7. しかし、決意を持って上昇したあなたは今「創生」という庵にたどり着く。そこには扉が三つあり、ひとつは「落下」もうひとつは「意志」そして三つ目は「卑下」である。落下はあなたを直に深みへと落とすが、それは、唯一外部からの思いがけない出来事がそうさせるのであって、この扉を自ら選ぶということはありえない。しかし、卑下の扉を行

けば、これまで歩んできた道を、激しい渦に巻かれながら引き戻される。失ったもの、犠牲にしたことの全てを絶え間なく思い返し、遠回りにあなたを奈落の底へと落とし込む。この卑下へ導く意識への試みは偽りであり、比較するものを過小評価したり、不釣り合いな天秤にかけてしまう。あなたは上昇することの苦労を、捨ててきた「利益」と比較している。しかしもっと細かに検討すると、上昇するために捨てたのではなく、他の動機であったことがわかる。卑下は、故に上昇とは関わりのない動機をごまかすことから始まる。ここであなたに尋ねる。何があなたの心を欺くのか？そもそも、最初に熱意を起こさせたその動機自体が間違っていたのか？あるいは実行する際の難しさなのか？ それとも、払ってもいない犠牲を払ったかのように誤って記憶したことなのか？ それとも、その犠牲は他の理由の為に払われたと誤って記憶したこ

となのか？　ここで私はあなたに問いたい。
あるときに家が焼けてしまった。それ故あなたは上昇することを決意した。それとも上昇したせいで家が焼けてしまったと、今になって思うのか？　更に、周りの家に何が起きたかにあなたは気づいたか？　間違いなく真ん中の意志の扉を選ぶべきであろう。

8. 「意志」の階段を上ると不安定なドームへとたどり着く。そこから狭く曲りくねった「見込み」という通路を行き「エネルギーの開放空間」と言う場所へ辿り着く。
9. その空間では、あなたは広大で殺伐とした風景と、巨大で不動な星々に映し出される恐ろしいほどの夜の静けさに脅えるやもしれない。そして、頭上の空に意味ありげな形をした黒い月を見るであろう。それは奇妙な月食で、太陽の真向かいに位置する。ここでは信

念を持って辛抱強く、夜明けを待ちさえすれば、何も悪いことは起こらない。

10. このような状況に陥ると、あなたはそこから一刻も早く脱出することを望むかもしれない。しかし、慎重に朝が来るのを待たずにそこを去ろうとすれば、手当たり次第に行方を決めかねない。だが、そこでの（暗闇での）行為全ては偽りで、一般に「即興」と呼ばれる。今私が述べていることを忘れて、即興で動き始めたら、渦巻く風に引きずられ、これまでに辿った路地や庵を通り抜けて、「融解」という暗闇の淵に落ちることを覚悟せよ。
11. 心の中の状態が相互につながりあっているのを理解するのは、なんと難しいことか。意識というものがいかに融通のきかない論理を持っているかが分かれば、この状況の中で、盲

目に即興に出る者が、止むを得ず自身や他の人を卑下し始めることが理解できるであろう。そこで自身に苛立ちを覚え、そして怨恨に陥り、最後には一ある日感じ取ることができた全てを忘れて一死に至る。

12. その空間で朝を迎えることができれば、真実を始めて照らし出すかのごとく、輝かしい太陽が目の前に昇ってくるだろう。そこであなたは存在する全てのものに意図があることが分かるだろう。

13. 暗闇に光をもたらすために、自ら進んで暗い領域へ降りることを選ばない限り、ここから落ちることはない。

これ以上、この課題を追求することは役に立たない。なぜなら経験なしでは、本来成し遂げられるであろうことも想像だけで終りかねないからだ。

ここで述べられたことがあなたの役に立ちますように。しかし、ここまで説明されたことが役立たないと意義を唱えるのであれば、その疑う心には根拠も理由もなく、それはあくまで鏡に映る像であり、またやまびこの音であり、影のそのまた影にすぎない。

XX. 心の中の真実

1. 私の言葉に耳を傾けなさい。そこでは寓話的現象や外の世界の風景を単に直観するだけでなく、精神的世界の真の描写も見つけることができるだろう。
2. あなたが旅路で通る数々の「場所」を、それぞれ実在すると信じてはならない。そのような困惑は度々、深い教えをうやむやにしてきた。今日でさえ、天国、地獄、天使、悪魔、怪物、魅惑の城、遠き理想郷など「悟った者」には、目に見える現実だと信じているものもある。しかし、解釈は逆だが、同じ偏見が知恵のない懐疑主義者たちによって、これらが熱狂による単なる「幻覚」や「妄想」であるとされてきた。

3. もう一度繰り返す。これらの全ては、外の世界の物質が象徴化されたものであるが、これらは実在する精神状態に通じていると理解すべきだ。
4. これまでに私が述べたことを考慮し、寓意の奥にある真実を見出すことを学びなさい。時にそれは心を惑わすこともあるが、時にまた寓意的象徴なしでは把握しえない現実を解明してくれる。

数々の英雄たちが到達を切望した神々の都、人々
がその都を語った時 ー
神々と人類とが天性のままに共存した楽園、人々
がその楽園を語った時 ー
人々が滅亡や洪水を語った時 ー
それぞれに尊い内なる真実が語られた。

後に救世者達は、我々が切に望む失われた調和を取り戻すために、二極の天性と共にメッセージをもたらした。ここでまた尊い内なる真実が語られた。

しかし、これら全てが心の外において語られたとき、それは誤りや偽りとなった。

とはいえ、外の世界の様と内なる眼差しとの融合は、この眼差しを新たな旅路へと導く。現代の英雄達は星々へと向かって飛び立つ。彼らは過去に忘れ去られた境界を飛び抜けていく。自らの世界から飛び出し、知らず知らずのうちに光輝く内なる中心へと駆り立てられる。

経験

勤め

このセレモニーは、参加者の希望によって行われます。参加者全員着席。助手が参加者一同に起立、そして着席を促す。司宰者、助手は起立したままでセレモニーを開始する。

司宰者：私の頭の中は静けさを失っている。

参加者：私の頭の中は静けさを失っている。

司宰者：私の心は波立っている。

参加者：私の心は波立っている。

司宰者：私の身体は緊張している。

参加者：私の身体は緊張している。

司宰者：私は身体の緊張を和らげ、心を落ち着かせ、そして頭の中を鎮める。

参加者：私は身体の緊張を和らげ、心を落ち着かせ、そして頭の中を鎮める。

司宰者と助手は着席し、数分経たせる。

助手は立ち上がり、場にふさわしい「原理」又は「内なる眼差し」の一節を朗読し、参加者に瞑想を促す。そして着席。

数分後、司宰者は起立し、ゆっくりと間を取りながら、以下を朗読する。

司宰者：身体の緊張を和らげ、心を静めます……………。

そして、頭上に透明で光り輝く球を思い浮かべましょう。この光の球が静かに降りてきて、あなたの胸の中心に収まります……………。

この光の球が胸から広がっていく感覚を意識しましょう……………。

この光の球たまの感覚が胸の中心から体の外へと広がります。それに伴いあなたの呼吸も深まって行きます。

手を始め身体の至るところに新たな感覚を覚えるでしょう……。

身体の中でうねりが高まっていくのを感じるでしょう。そして暖い気持ちや思い出に包まれるでしょう……。

さあ、気フォースの力を解き放ちましょう……。

この気フォースの力はあなたの心と身体の糧となるでしょう……。

フォース
気フォースの力に自分を委ねましょう……。

目の奥に輝く光を見つめ、その光をあるがままに自由にさせましょう……。

この^{フォース}気の力を感じ、その中の光を実感しましょう……。

そしてそれに身を委ねましょう……。

助手： ここに得られた^{フォース}気の力と共に、我々にとって真に必要なことを成し遂げられるよう瞑想しましょう……。

助手は、参加者全員に起立を促し、「問いかけ」を続ける。少し間を持って、司宰者は次を述べる。

安らぎ、^{フォース}気の力、そして喜びを全ての人々に！

あなたにも、安らぎ、^{フォース}気の力、そして喜びを。

手当て

この儀式は一人またはそれ以上数名が希望する際
に行う。

全員起立。

助手が皆座るようすすめる。

司宰者と助手は起立したままでいる。

司宰者：私の頭の中は静けさを失っている。

参加者：私の頭の中は静けさを失っている。

司宰者：私の心は波立っている。

参加者：私の心は波立っている。

司宰者：私の身体は緊張している。

参加者：私の身体は緊張している。

司宰者：私は身体の緊張を和らげ、心を落ち着かせ、そして頭の中を鎮める。

参加者：私は身体の緊張を和らげ、心を落ち着かせ、そして頭の中を鎮める。

司宰者と助手は着席し、少し待つ。司宰者は立ち上がる。

司宰者：^{フォース}気の力を受けたい人は、手当ての瞬間に新しい感覚を覚えるでしょう。身体の中でうねりが高まっていくのを感じ、暖かい気持ちや思い出に包まれるでしょう……。ここで、^{フォース}気の力の流れを自由に解き放ちましょう。

^{フォース}気の力に自分を委ね、あるがまま自由にさせましょう……。

この^{フォース}気を感じ、その中の光りを実感しましょう……。

^{フォース}気の力に身を委ねましょう……。

しばらくして、助手は立ち上がる。

助手：^{フォース} 気の力を受けたい人は立ち上がって下さい。

助手は、参加者が大勢の場合は席の所で起立するよう促し、参加者が少数の場合は、司宰者の回りに円を描くよう促す。少しして司宰者は手当てを始める。必要な場合は助手は参加者を席へ誘導するなどの援助をする。

手当ての儀の後は、参加者がその体験を自分のものができるよう、しばらく時間が与えられる。

助手： 今日ここに得られた^{フォース} 気の力と共に、我々にとって真に必要なことを成し遂げられるよう瞑想しましょう……。又は我々の愛する人たちが真に必要なことを成し遂げられるよう瞑想しましょう。

助手は、参加者全員に起立を促し、「問いかけ」を続ける。

少し時間を置く

司宰者： 安らぎ、^{フォース}気の力、そして 喜びを全ての
人に！

参加者： あなたにも、 安らぎ、^{フォース}気の力、そして
喜びを。

安らぎ

この儀式は、参加者の希望によって行われる。参加者は着席、司宰者、助手は起立。

助手：今日、我々は私たちの愛する人達に思いを寄せるべく、ここに集います。愛する人達の中には、精神的に苦しんでいる人や人間関係で悩んでいる人もいるでしょう。健康上の悩みを抱えている人もいるかもしれません。そうした人達にとっての最善を願い、ここに祈ります。

司宰者：私たちは、愛する人達の安らぎを願う思いが、彼らに届くと信じます。ここで、私たちが愛する人達のことを思い浮かべましょう。彼等の存在を感じましょう。そして彼等との触れ合いを心で実感しましょう。

助手：それでは、目を閉じて愛する人達が直面している困難に思いを寄せ、黙想しましょう……。

参加者が瞑想できるよう数分間置く。

司宰者：そして穏やかな安らぎが波のように彼等に届くよう思いを送りましょう……。

助手：しばらくの間、心の中で、愛する人達に安らぎと穏やかな気持ちが訪れる状況を思い描きましょう。

参加者が心を集中できるよう数分間置く。

司宰者：この儀式を閉じるにあたって、希望する人は、今は時間や空間を共にしていないけれど、かけがえのない人達の存在を感じましょう。彼等と分かちあった愛、安らぎ、そして暖かい喜びを感じましょう……。

少しの間を置く。

司宰者：この儀式は、私たちの愛する人達と私達自身の、心の安らぎとなり、またさらに私達の人生に潤いを与えてくれます。

ここに集ったみなさんの深い祈りによって、安らぎに満たされた全ての人々を、祝福しましょう。

守り

この儀式は個人、又は集団で行われる。

全員起立している。

司宰者と助手は子供達の正面に立ち、他の参加者は子供を取り囲む。

助手： この儀式の目的は子供たちを我々の社会に迎え入れるということです。

古代より、子供たちは命名の儀や洗礼の儀など、あらゆる儀式の中心におかれてきました。これらの儀式を通して、人生の節目や転換期を認識してきました。

今もなお、生年月日や出生地などの情報を形式的に記録する習慣は続いています。しかし、私たちが誠心誠意をもってとり行うこのような儀式は、単に紙に記入する冷たい書式のたぐいとは異なります。むしろこれは、親、兄弟姉妹、家族そして友達たちの温かい喜びに支えられて、子供たちが社会の一員となる儀式なのです。

この儀式を人生の節目とし、子供たちはこの社会の新たな一員となり、私たちは、彼らが万が一不

運に見舞われた時、彼らを守ることを約束します。

少し時間を置き、司宰者は参加者に優しい口調で語ります。

司宰者： この子供たちが守られることを、ここに願います。

助手： 喜びを持って子供たちを迎え、彼らを守ることを誓います。

司宰者： 私たちの最善の願いを掲げましょう。安らぎと喜びをみなさんへ！

司宰者は優しく子供一人ひとりの頭に手を当て、額にキスする。

婚礼

全員起立している。一組または複数のカップルで行う。司宰者と助手はカップルと向かい合っている。

助手： 古代より、結婚は人々の立場の変化を示す儀式でした。

人生の節目、節目に、それに伴った儀式があります。

私たちは個人的にも社会的にも、人生の節目に儀式を行い、多かれ少なかれそれらを習慣として受け入れています。

朝は朝、夜は夜で異なる挨拶をし、人に会った時は握手を交わし、そして誕生日や卒業、就職などを祝います。スポーツの大会なども儀式をもって行われ、宗教、政治、民間それぞれの儀式も、その場にふさわしい態度へと導いてくれます。

結婚は人生における大きな節目であり、すべての国で法的手続きがなされます。つまり、婚姻関係

とは国家や社会において、配偶者同士が新たな立場に立つことを意味します。カップルが結婚の絆を結ぶとき、彼らは新たな人生を思い描きますが、それは単なる形式的なものではなく深い感情を伴って行われるものです。

さらに、人生の節目となるこの儀式によって、二人は新たな、そして末永い絆を結ぶことを決意します。彼らはお互いの最善を受け与えることを願います。そして実子であれ養子であれ、子供を授かることにより、この関係を更に深めていきます。

結婚をこのようにとらえるなか、婚姻の形式的・法的重要性を認めます。しかし、心と精神面から言えば、この儀式に真意をもたらすのは、唯一その当事者二人です。

言いかえれば、この儀式で二人は新たな人生を築き、自らの感情に沿って深く結ばれることとなるのです。

私たちが二人を結婚させるのではなく、彼らが私たちの前でお互いに結婚を誓うのです。

司宰者： この儀式が真実で、あなたがた自身のものになるよう、訊ねます。

(一方に向かって聞く。)

貴方にとってこの結婚とは何ですか？

聞かれた者は、はっきりとした口調で答える。

司宰者：（二人のうちのもう一方へ向かって聞く。）

貴方にとってこの結婚とは何ですか？

聞かれた者は、はっきりとした口調で答える。

司宰者：それでは、この結婚は、二人がここで述べた希望と最も深い意志に沿ったものとなるでしょう。

（二人に優しく挨拶する。）

導き

この儀式は大きな愛情に包まれ、これを司る者は最善を尽くすことが求められる。この儀式は、希望する本人、またはその介護者の要望により繰り返し執り行なわれる。

司宰者は看取られる人と二人になる。

看取られる者の意識の有無や明確さにかかわらず、司宰者はその人に寄り添い、やさしくはっきりとした声でゆっくり話しかける。

司宰者：人生の記憶はあなたの行いの審判です。
少しの時間で、あなたの最善な部分を思い起す
ことができるでしょう。恐れずに、記憶を清めま
す。穏やかに記憶をたどり、心を静めましょう。

司宰者はしばらく沈黙してから、同じ口調で力強
く読み続ける。

心の動揺や絶望感を、もう捨てましょう.....。

低く、暗い領域へ逃げたいと思う気持ちを、もう
捨てましょう.....。

記憶への執着をはねのけよ.....。

夢景色に惑わされることなく、上昇の決意と共に
心の自由を維持せよ.....。

.....

さあ、それでは昇天を始める決意をしまし
う.....。

清らかな光は広大な山脈の峰々を照らし、幾千も
の色を帯びた水は、聞き覚えの無い旋律の中、水
晶のように輝く高原や大草原を流れる.....。

中心に近づこうとすればするほど、光の威力が更
に強く、あなたをはねのけようとします。その力
を恐れてはいけません。あたかも水か風のように
受け入れましょう- 正しく、そこには命が存在し
ています。

広大な山脈の峰に秘境の都を見つけたとき、あな
たはその門のありかを知るでしょう。その門は、
あなたの命が姿を変えた瞬間に明らかとなる。そ

の巨大な扉は様々な模様や色で描かれ、それらを「感じ取る」のです。この都には今まで成し遂げてきた事と、これから成し遂げるであろう事が秘められています。

司宰者は少しの間沈黙し、同じ声の調子と強さで読み始める。

今、あなたは自分自身との和解ができました…。

今、あなたは清められました…。

最も美しい「光の都」へ入る準備をしましょう。そこは今までに耳にしたことのない歌声が響く、今だかつて見たことのない都です。

さあ、最も美しい光に入る準備をしましょう。

弔い

司宰者： この肉体の生命は尽きました。今、この肉体と私たちの記憶にあるこの人の姿を、心の中で切り離す努力をしましょう。

この肉体にはもう私達の声は聞こえません。私達が覚えている人は、この肉体ではないのです。

身体から離脱した生命の存在を感じない人は、死がこの身体を麻痺してしまいましたが、その人の行いは止むことなく、その影響は決して途絶えることはない、と捉えてみましょう。

人生で積み重ねてきた一連の行いは死によって止められるものではありません。

この真実を瞑想するということは、なんと意義深いことでしょう、たとえ、ひとつの行いが別のものへと形を変えていくことを完全に理解できなくとも…。

一方で、もう一つ別の生命の存在を感じる人は、死は単に身体を麻痺させたが、心は今一度自由を勝ち取り、輝く光への道を開くのだとと捉えてみましょう。

どんな考えであろうとも、この肉体に涙するのは止めましょう。

その代わりに、私たちの信念の根源について瞑想しましょう。そうすれば、穏やかで静かな喜びが訪れます。

心には安らぎを、理解には光を。

心得

この儀式は、お互いの共通体験、理念や態勢、習慣などを通してこの社会に賛同することを確認するものです。

この儀式は人々の要望によって行われ、「勤め」の後に続く。

参加者には事前にテキストが配布されている。

司宰者と助手は立ち上がる。

助手：この儀式は我々の社会に積極的に加わりたい人々の要望によって行われます。この儀式では、周囲の人々や自らの生活を向上させるために、個人としてまた集団として尽くすことを誓います。

助手は賛同したい人に起立するよう促す。

司宰者：人間が体験する痛みや苦しみは、良き知識の進歩と共に後退していく。それは利己主義や、人を弾圧するための知識ではありません。

良き知識は正義へと導きます。

良き知識は和解をもたらします。

良き知識は我々の意識の奥深くにある聖なるものを解き明かします。

助手：（賛同する者と共に読む。）

我々は、人間を最も尊いものとし、金銭、国家、宗教、模範とされるもの、そして社会構造などにみられる価値を上まわるものとしします。

我々は考えの自由を推進します。

我々は人類すべての平等な権利と機会均等を推進します。

我々は文化や習慣の多様性を認め、奨励します。

我々はあらゆる差別に反対します。

我々は肉体、経済、人種、宗教、性的、精神的、道徳へのあらゆる暴力に対し、生涯を尽くして抵抗します。

司宰者：宗教や信仰心があるかないかで人を差別する権利は誰にもありません。従って私たちは、自らの精神性や永遠の命、そして聖なるものを信じる権利をここに宣言します。

私たちの精神性は迷信とは異なります。寛大さに欠ける精神性とも異なります。それは教義の説く精神性でもなく、宗教的暴力がもたらす精神性でもありません。我々の精神性とは、人間の最も崇高な志を育成するために、深い眠りから呼び起こされたものです。

助手：（賛同する者と共に読む。）

我々は考え方、感じ方、行動を統一させ、人生に統一性を持たせたい。

我々は失敗を認めることにより、悪しき良心を克服したい。

我々は説き明かすこと、そして和解することを目指します。

我々は「自分にしてほしいように相手に接する」という教えが、更に強化されるよう誓いをたてます。

司宰者：さあ、新たな人生を始めよう。

我々の深部にある聖なる証を見だし、私たちのメッセージを人々へ伝えていこう。

助手：（賛同する者と共に読む。）

今日から、我々は新たな人生を歩み始めます。まずは私たちの心に喜びと信念をもたらしてくれる安らぎと^{フォース}気の力を探し求めることから始めます。そして、最も身近な人たちのところへ行き、自ら

が経験した偉大で最良の全てを分かち合おう。

司宰者：すべての人に安らぎ、^{フォース}気の力、喜びを！

助手：（及び賛同者全員）

あなたにも、安らぎ、^{フォース}気の力、喜びを！

道

もしあなたが、自分の人生は死で終わると信じる
なら、あなたの考え、感情、行いは無・意味なも
のとなる。全ては支離滅裂と崩壊で終わる。

もしあなたが、自分の人生は死で終わらないと信じるなら、あなたの考え、感情、行いを統一させなくてはならない。全てが一貫性と統一性に向けて前進しなくてはならない。

もしあなたが、他人の痛みや苦しみに無関心であれば、あなたが求める助けに正義を見出すことはない。

もしあなたが、他人の痛みや苦しみに無関心でないのであれば、彼らを助けるために自分の考え、感情、行いを統一させなければならない。

自分にして欲しいように他人に接することを学びなさい。

自分、身近なもの、そして社会の痛みと苦しみを
乗り越えることを学びなさい。

自分の内と外に存在する暴力に抵抗することを学びなさい。

自分の内と外にある聖なるものを認めることを学びなさい。

「自分は誰なのか」を自問せずに人生を通り過ごしてはならない。

「自分はどこへ向かうのか」を自問せずに人生を
通り過ごしてはならない。

「自分が誰なのか」を自問せずに、一日たりとも
通り過ごしてはならない。

「自分がどこへ向かうのか」を自問せずに、一日たりとも通り過ごしてはならない。

大きな喜びを心の中で感謝せずに通り過ぎてはならない。

大きな悲しみに直面した時、心の中に留めた喜び
を呼び起こさずに通り過ごしてはならない。

この村、この街、この地球上、そして無限の世界
の中で、自分は孤独であると想像してはならな
い。

自分がこの時間と空間に縛られていると想像してはならない。

自分の死で孤独が永遠となると想像してはならない。